
時空艦隊『未来』

キプロス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時空艦隊『未来』

【Nコード】

N9921P

【作者名】

キプロス

【あらすじ】

2013年の新政権の誕生によって飛躍的發展を遂げた日本。エネルギー問題や経済問題を解消し、国防改革や外交問題の解決に臨む日本に対し、核の雨が降り注ぐ。2025年、核攻撃を受けた横須賀基地に勤務する海上自衛隊員達の前に現れたのは、84年前の日本だった……。

序章『変革』（前書き）

今作品は「時空。。」と銘打ったタイムスリップ小説の第2弾です。現在、第1弾の「時空戦艦『紀伊』」も執筆していますので更新は遅めかと思われませんが、精一杯書かせて頂くのでよろしくお願い致します。

序章『変革』

序章『変革』

2013年——世界に変革が巻き起こった。

民自党政権の任期満了間近となった2013年7月、衆参両院総選挙を開催、衆議院・参議院両院とも記録的差で民自党は惨敗し、野党第2党であった国民の党が政権を掌握した。国民の党はこうして政権交代を成したのである。その背景には民自党の『弱腰外交』と『科学技術の軽視』があつた。2009年6月、総辞職に追い込まれた民自党鳩峰内閣に代わり誕生した管内閣は2010年9月、尖閣諸島での海上保安庁巡視船と中国漁船の衝突事件において中国に屈し、外交面での醜態を晒してしまった。また、事業仕分けを行っていた1人の議員の『1番じゃなきゃ駄目ですか?』発言に加え、日本はおろか世界を変える発見——『オーランチオキトリウム』研究に対する扱いも問題だった。

オーランチオキトリウム——茨城県筑波大学の渡辺教授が東京湾やベトナムの海等アジアの海での調査で発見された藻である。採取された計150株の内、沖縄で採れた株が極めて高い油の生産能力を持つ事が分かった。沖縄の海で採れたオーランチオキトリウムは水の有機物を元に、化石燃料の重油に相当する炭化水素を作り、細胞内に溜め込む性質を持つ。そして、同じ温度条件で培養する事により、これまで有望視されていた藻類の従来値に比べ、10倍近く量の炭化水素を作るのだ。この油はナフサや軽油、ガソリン等も作る事が出来る。

このオーランチオキトリウムは、深さ1mのプールで培養すれば

面積1ha辺り年間約1万t作る事が出来ると試算されており、国内の耕作放棄地等を利用して生産施設を2万ha確保出来れば、日本の石油輸入量に匹敵する生産量となると考えられた。

2つの問題の他、無意味なバラマキと将来性が皆無の政策、更に党内の反米親中体制が国民の不信感を生み、大きな仇となった。2012年、中華人民共和国の周副国家主席が国家主席に就任した。民自党内部で1人の大物議員の元、親中思想の議員連合が内閣に影響を与え続けた。また、2012年の米国新大統領選挙において民主党のムトンボ第44大統領が再度勝利し、第45代大統領を続けたが、大統領や米政府は民自党の沖縄米軍基地問題に嫌気が差し、日米関係は崩壊寸前に至っていた。

こうして2013年7月を迎えた民自党は敗北した。

新総理大臣に就任した国民の党、江山議員は就任演説において、2010年に発見された『オーランチオキトリウム』の研究を国家プロジェクトとして国家戦略の1つにすると国民に伝えた。2010年頃から、渡辺教授は複数の企業に研究投資を進めていたが、全ての企業は不況を理由に断った。ただ、日本に対する愛国心から中韓等の企業には提案せず、研究技術を奪われないよう守り続けていた。無論、民自党は研究を国家プロジェクトとはせず、放っていた。大規模なパフォーマンストと900兆円ともいわれる国の借金を返済する為の最後の綱として国民の党は大博打に打って出たのだ。就任演説において江山総理はオーランチオキトリウムの実用化を5年以内に実行すると表明、またこの技術を国家機密とした。更に10万haの耕作放棄地でこのプロジェクトを実行すると発表して、雇用・経済政策として大々的にアピールした。

農林水産省の調査では、2013年時点での耕作放棄地は43万haに相当する。その内、30万haがそのままでは農地としては使用出来ない。その内、14万6000haは機械を使って草や木を抜く等すれば使用出来るが、15万4000haは既に森林や原

地となっており、復元不可能と判断されている。また、中国が土地を買い漁っている事も問題とされる。

中国の土地買収の規制法案と踏まえ、国民の党は国家プロジェクトを始動した。

2017年、国民の党が政権を掌握してから4年、当初5年とされたプロジェクトは過去の研究2年間の成果を踏まえて、予定よりも早く成功した。完成品は国が設備した大型実験プールで成果を出し、翌年からは整備された耕作放棄地での培養が始まった。

2019年度には2万haで国内輸入石油量に相当する量の油を生産。

2020年度には——韓国に向けた石油輸出が開始された。

2022年には遺伝子組み換えの結果、20倍近くの炭化水素を生成するオーランチオキトリウムが開発された。これにより、今までの数倍の量の油を生成する事が可能となり、欧米等で始まりつつあった研究に大きな差をつける事が出来た。

2013年を境に、ロイヤル・ダッチ・シェルやBP等石油メジャー、中東諸国やロシア等採油国は環境問題に言及した反日キャンペーンを展開し始めた。シー・シェパードやグリーンピースに積極的に資金を提供、エコ・テロリストと呼ばれる組織の多くが反日運動を行った。

彼らのいう問題定義は無尽蔵の石油を使用し続ける事は地球を破壊させる——というものだった。CO₂の増大が最も指摘された。

この問題の解決策は以前からの環境に優しい発電技術の開発、各国での植林支援等が言われたが、最大の問題解決策は——『電気自動車』の普及だった。

2013年の経済政策において国民の党は電気自動車の普及を表明した。電気自動車はその名の通り、電気を動力とする自動車である。排気ガスを排出せず、騒音も無く、エネルギー効率も良い。当初は原子力発電所で造られた電力ならエネルギー費用も安く済むとされたが、安価な日本製石油を電力発電に利用すれば、原子力発電に頼らず安価な電力を供給出来ると考えられた。更に言えば、排気ガスの問題も無い為、CO2も大幅に削減出来た。

2017年、国民の党『国防政策』の一環として、米国の原潜『ヘレナ』が海上自衛隊に配備された。ロサンゼルス級原子力攻撃潜水艦第38番艦であるヘレナは、民自党時代から提案されてきた米海軍払下げの中古原潜購入で、既に民自党時代から購入が検討されていた。海自で新設の原潜を造るよりも非常に安上がりで、中国の機動艦隊に対抗する為には必要な手段といえた。この他、国民の党は外交を有利に進める為、国家の安全上の為という事から軽空母の建造を進めた。

2020年、日本初の空母誕生。

2021年、国産海上自衛隊戦闘機F-35J誕生。

2021年、原子力駆動空母の開発案が出される。

空母は大きな波紋を生み、石油企業が反日キャンペーンを展開する材料となった。この頃、世界の石油価格は軒並み下落していた。日本国内の石油生産量はかつて日本が輸入していた石油の5倍で、韓国・中国・インド等アジア圏、更にオセアニアやヨーロッパやアメリカ等、世界が依存していた。中国としては許すまじ事態で輸入禁止も検討したが、中国企業はそれを望まなかった。かつての中東諸国からの石油に比べれば価格が安いからだ。その要因は中国のレアースと同じだった。中国内モンゴル自治区のバイウン鉱区に位置するバイウンオボ鉱床は他国の鉱床に比べて地質が柔らかく、人

件費も少ないので世界シェアを掌握した。

そして、それは日本にも該当した。これまでの採掘を必要としない石油生産。人件費は張るものの、十分といえる程に安かった。

特に依存したのは同じく資源を持たない国——韓国だった。

石油の売れなくなった中東諸国やロシア等では、テロが頻発していた。これまでの資金源を失ったテロリスト達は『敵』として日本に『聖戦』を仕掛けた。そして2021年、東京山の手線同時多発テロ事件が起きた。これは山の手線各所で行われた同時多発爆破テロ事件で、数百 数千人が死傷した。

これを受け、国民の党政権は安全保障の確立の為、自衛隊の軍備拡張を表明、原子力空母の建造案はこの事件を期に出されたものだった。

2025年11月10日PM11:46

ロシア連邦/エンゲルス空軍基地

「これがTu-160——『白鳥』ですか」

防寒着を着たロシア人空軍将軍、ティーホフ中將は後ずさりし、息を呑んだ。「てつきり全機運ばれていらっしゃるものだと思っていました」

「全機？」左隣に立つ男は首を振った。「14機で十分だよ」

ロシア空軍のアレクサンドル・クラスノフ大將はロシア軍内の反乱勢力の1人だった。中柄で敏捷そうで、その顔は長年に渡って厳寒な冬を越してきた老人の冷静さが溢れている。肌は純白、頭はしっかりと整えられており、眉毛は綺麗な山形をしていた。石油の価

値が崩壊し、経済の一本柱を失ったロシアは国家を存続させるべく、軍事費を更に削り取った。今のロシア軍に文明的なものは兵器しか存在せず、日常の生活は只管原始時代に逆戻りしていた。

「喰うか喰われるか——だ」

クラスノフは言った。「今や兵士達は満足に食事を摂る事も出来ない」クラスノフは言い、Tu-160の前に歩み寄った。「日本には舞台から降りて貰わないとな」

低い笑い声に似た呼気がクラスノフの口から漏れ出した。彼はTu-160の翼に凭れ、銀のスキトルの蓋を開けた。ウイスキーが喉を焼き、空を見上げる。純白のベールが降り注ぎ、エンゲルス空軍基地とTu-160と2人のロシア空軍將軍を包み込んだ。

「少し早いクリスマスプレゼントを北朝鮮の奴らは喜ぶかな」

2025年11月18日AM08:00

北朝鮮／方？空軍基地

特殊ともいえない昔ながらの不格好な地下シェルターの中に、ロシア空軍機だったTu-160が並んでいた。それを人民解放空軍の金光大將が眉を吊り上げて見据えた。その隣には、ロシア軍反乱勢力のベロワ空軍大尉が立っていた。

「Kh55に取り付けた核弾頭は200kt相当、各機612基ずつ搭載してあります」ベロワは言った。

「それでアメリカは落とせるかもしれないな」金は言った。「で、例の機は？」

ベロワは歩を進め、別のシェルターへと入った。内部は特別な構造になっており、複数の空調設備が備わっていた。その先に戦闘機が駐機していた。

「Su-50、史上最高の航空機にしてF-22に唯一対抗出来

る戦闘機」

「この目で拝めるとは」金は息を呑んだ。

「ただ、経験上米空軍はこのS u - 50への対抗策を整えています。これが開発されるずっと前から、彼らはF - 22同士を戦わせ、対第5世代戦闘機の空戦を熟知しているのです。その為、経験が物を言いますが、残された時間は少ない。ですから、我々がS u - 50を動かします」

「墜ちたらばれるんじゃないか？」金は言った。

「いえ、心配なさらず。我々はロシアを解放し、日米に宣戦を布告します」

ベロワは金に視線を向けた。

「——そして我々は勝利する」

序章『変革』（後書き）

作中のオーランチオキトリウムは実在します。これまでの藻類の生産量は1ha辺り年間約140t程度で、オーランチオキトリウムはその10～12倍です。今後の研究の課題は炭化水素を生成する元となる有機物の中でも最も効率の良いものを探す事だそうです。

第1章『崩壊』第1話 不穏（前書き）

・『あかぎ型航空機搭載型護衛艦』性能諸元

排水量 基準：20,000 t

満載：32,000 t

全長：250 m

全幅：38 m

吃水：8 m

機関

COGAG方式2軸推進

ガスタービンエンジン×4基

（120,000 hp）

最高速度：30ノット以上

乗員：3,000名

兵装

高性能20mm機関砲（CIWS）×2基

SeaRAM×2基

Mk.41VLS垂直発射装置×16セル

（ESSM）

F-35BJ（STOVL型）支援戦闘機×25機

SH-60K哨戒ヘリコプター×2機

システム

MOFシステム（QYQ-11）

リンク16

FCS-3射撃管制装置

レーダー

FCS - 3 多機能レーダー

OPS - 20改 対水上レーダー

ソナー

OQQ - 22改 統合ソナー・システム

電子戦・対抗手段

NOLQ - 3D 統合電子戦システム

Mk - 36 - SRBOC 対抗手段システム

2020年に就航した海上自衛隊初の航空機搭載型護衛艦。イン
ヴァンシブル級を始めとするS/VTOL空母に見られるスキージ
ヤンプ甲板を発艦補助として備えている。就役後、第1護衛艦群に
配備された。横須賀を母港としている。

第1章『崩壊』第1話 不穩

第1話『不穩』

2025年11月15日AM10:00

アメリカ合衆国バージニア州ラングレー、世界に名立たる対外諜報機関『CIA』本部が鎮座する地である。その内部にあるCIA長官室は非常に簡素なもので、金庫や隠し部屋をカムフラージュする為の大きな本棚も無ければ、ヨーロッパの名画といった豪華な装飾品の1品も無かった。情報は携帯端末と最新型のPCに貯蓄されており、装飾品といえる物は額縁に入れられ、壁に掛けられた米国各所の風景写真。1冊のファイルを持った眼鏡の中年男性が革張りの椅子に座する初老の男の前に立っていた。

「TU-160の居場所は分かったのか？」

CIA長官のベン・シンプソンは封を開け、書類に目を通し始めた。

「ええ……まあ、はい……」CIA職員のデイン・ヤングは深く息を吸い、デスクの前に置かれた椅子に腰を下ろした。「追尾衛星の映像解析によると、北朝鮮国内に――」

「クソッ！これで厄介事が1つ増えたな」シンプソンは憤りを募らせながら言った。

「我々がTU-160を発見出来る可能性は限り無く0%に近いと思われます。北朝鮮は各所に地下シェルターを形成しています。」

ロシア政府も自国の戦略爆撃機が忽然と失踪した事を公表しないでしょうから協力を得られはしません。S V Rで秘密裡に調査を進めるでしょう」

「賢明に考えれば、これは由々しき事態だ」

シンプソンは言った。「当のロシアが崩壊寸前なんだ。奴らに任せられるか？」

ロシアは崩壊寸前に立たされていた。ロシアはサウジアラビアに次ぐ世界第2位の原油生産国であり、同時にサウジアラビアに次ぐ世界第2位の原油輸出国である。かつてはその豊富な地下資源にものを言わせ、長期的な経済停滞を脱した。2013年頃からは先進国に近いだけの成長を遂げ、栄光の時は2020年代まで続いていた。

しかし2021年、遺伝子操作によって改良が施されたオーランチオキトリウムの台頭によって日本国内の油生産量が23倍近くになり、アジア圏を中心としていた市場は世界に拡張された。一般の原油価格は暴落、結果的に石油に依存していた中東圏・アフリカ圏・ロシアの経済は危機に陥り、経済は破滅寸前に至った。経済柱の1本を失ったロシアはその後、天然ガス・兵器輸出で何とか経済を支えていたが、それも終焉に向かいつつあった。それを裏付けるように国内経済は衰退の一途を辿っており、国民は疲弊、軍内では元々少なかった予算が更に削られて、兵士達の中で飢餓が起こった。

「——例の『ロシア軍強硬派』もロシア経済崩壊で生まれた存在だ」

CIA長官のシンプソンは言い、書類に目を走らせた。「T U - 160を奪ったのは奴らだろう」

「Su-50が紛失した事件もありますから——ロシアも薄々、自国の軍隊に裏切り者が居る事に気付き始めているでしょう。強硬派が北朝鮮にTu-160を提供したとなると、赤の広場で軍事クーデターを起こし、クリムリンの指導者達を失脚させるだけでは終わると思えませんね。恐らく、北朝鮮を利用して何かを企んでいるはず——」

「ああ……」シンプソンは頷いた。「“X-day”は間近だろう」

「X-day——ですか」

「そうだ。大統領に進言して、防壁を築かねばならんだろうな」

2025年11月24日AM11:00

日本/横須賀

「何だか嫌あ　な感じだね」

瞳に広がる紺碧の海原。その上を駆り進む1隻の潜水艦。

「シーウルフ級……だよな？」

ぽかんと口を開けて洋上の狼を眺める1人の男、三門雄真二等海尉は自信なさげな声で言った。右隣に佇む女性——成瀬美夏二等海尉は静かに頷いた。米海軍の原潜が横須賀に入港するのは今月9回目。2人を始め、不穏な空気を肌を感じるのに時間は掛からなかった。その他、トリマラン型設計で特徴的な艦体を持つインディペンデンス級沿岸域戦闘艦、レールガンを搭載した最新鋭駆逐艦のズムウォルト級等、米海軍の次世代艦が多数寄港していた。

「多分、日米合同演習に参加する艦だ」三門は言った。

2人の傍らには海上自衛隊初の支援戦闘機、F-35B J『ライトニング?』が駐機されていた。2人はF35B Jのパイロットだった。海自の特別飛行科の訓練として航空自衛隊に配備され、『あかぎ』の完成まで通常離着陸型のF-35A Jを操縦していた。

「戦争でも起こりそうな勢いだね」

成瀬は言った。「この『あかぎ』は最前線に送られるのかな?」

「その為のフネだからな。出し惜しみなんて出来ないさ」

『あかぎ』は海上自衛隊初の航空機搭載型護衛艦で、事実上のS T O V L 軽空母だった。英海軍のインヴィンシブル級軽空母を始めとするS/V T O L 型空母に見られるスキージャンプ甲板を発艦補助として備えており、F-35B Jはそれを用いて発艦する。武装兵器は護衛艦におなじみの高性能20mm機関砲——いわゆるフアランクスが2基、Sea R A M が2基、そしてM k・41V L S 垂直発射装置が16セルでE S S M を搭載している。根幹となるF-35B Jの艦載機数は最大25機、実際の運用数は19機程度である。

2020年就航したあかぎは広報活動を円滑に進める為にもと、横須賀に配備された。艦上での初離陸は2022年の事で、同年に第1護衛艦群の旗艦となった。

あかぎ就航を受け、第1護衛艦群は事実上の機動艦隊へと生まれ変わった。

第1章『崩壊』第1話 不穏（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第2話 暗殺

第2話『暗殺』

2025年11月27日AM09:23

ロシア連邦／モスクワ近辺空域

A-50、ロシア空軍の早期警戒管制機（AWACS）であるこの機は西側諸国に比べれば性能は低いが、ロシア空軍では貴重な航空機だった。機上にシュミエーリムレーダー・コンプレックスを搭載し、近代的な電子機器を複数配備し、老朽化を補っていた。8機のSu-50第5世代戦闘機を率いながら、勇猛果敢にモスクワの空に小さな円を描いて飛び回った。その機内で、ロシア空軍のティホフ中將は通信機器の前に座し、インカム式の通信機から響く1人の男の声を聞き取った――。

『――私だ』

声の主はロシア空軍、アレクサンドル・クラスノフ大將だった。

「クラスノフ大將……」

ティホフの声は寂しげだった。「今、何処に？」

『何処？ 予定通り、あの人の住家――』間を取って、彼は囁くように言った。『クレムリンの近くだ』クラスノフは言った。『全ては計画通りに進んでいる』

ティーホフは息を呑んだ。「本当にやる気ですか？」

『本当だ』通信機の向こうで沈黙が流れる。『筋書き通り、今日午前6時00分、私はエンゲルス空軍基地でTu-160を強奪した犯人についての手掛かりを掴んだとブレフキン大統領に報告、大統領には軍内の反乱分子の関係上、大統領官邸で直接伝えるものとして約束を結んだ……』

クラスノフは懐の——PSS消音拳銃に視線を下した。

『大統領は油断している。気付く前に——』

「分かっています」ティーホフは言った。「しかし、貴方がする事では無い！」

『違うな』PSSから視線を戻し、車内から外を眺めた。彼はロシア空軍の制服に身を包んでいた。軍帽に刻まれた双胴の鷲が猛々しくモスクワの曙光に煌めいていた。『私こそが適任だ。私以上にこの任務に適任の人間は居ないだろう』

ティーホフは静かに聞いていた。「しかし……」

『事は単純明快だからもう1度言おう……、私は——末期のガンだ』クラスノフは言った。『つまり、命僅かで退役間近の老人という訳だ。分かるだろう？』

「いえ……分かりません」

『分からないだと？俺が大統領を殺し、お前が俺を殺す。ただ、それでいい』

A-50機内で、ティーホフは沈黙した。

『34年前、1991年の夏……当時空軍の一兵士だった私は、8月のクーデターで改革推進側を推した上層部の命を受け、同胞に

あった防空軍の戦闘機に攻撃を行った——」クラスノフは間を置いた。『結果、我々は勝利し、クーデター側についた防空軍は敗北した』

クラスノフは言った。『あの日、図らずも死んだ人間が何人も居た。私が撃墜したMiG-23のパイロットもだ。血も見ないクーデターなど存在しないかもしれないが、祖国で流れる無駄な血を少しでも減らせるように済むクーデターなら、私は起こせると思った』

「大統領を殺すのは？」 ティーホフは言った。

『それは残念だ。だが、8月のクーデターの失敗がそれだ。“大統領が健康上の理由で執務不能に陥った……”。過去を遡れば、1945年の反ナチス派によって行われたヒトラー暗殺計画、『ワルキューレ作戦』もまた、指導者を殺し損ねたが故に失敗した』クラスノフは言った。『2つが合致するのは指導者の生死だ。日本の安価な石油のおかげで経済は崩壊し、それを追及されたベレスキン政権の支持率は20%を切っているからブレフキン大統領が死んでも咎める者はいない——という訳にはいかないだろう。誰であれ、国家の指導者を殺害すれば国家全体、国民全員に反旗を翻した事になり、我々は悪の根源として根絶やしにされる。私が狙うのは、表と裏をひっくり返す事だ』

「どういう事です？」 ティーホフは言った。「一体、何を——」

『私が悪役を演じるんだ。ロシア南部の分離主義派や北朝鮮と繋がりを持った、ソ連復活という過激な超国家主義思想を持ったロシア空軍大将。最大の敵を葬り去るべく、戦略爆撃機と核巡航ミサイルを北朝鮮に横流しし、大統領を殺害し、ロシアを転覆させようとした——スターリン以来の大悪党』クラスノフは静かに言った。『それを止めるのが——君の仕事だ。ガーリン副大統領が死亡を受けて就任、反乱軍指導者である彼は『国家非常事態委員会』を設立。テロリストから国家を守るべく君達はモスクワに展開、戒厳令を発令して正義の側に早代わり——という寸法だ』

「計画通り……ですね」

ティーホフは言った。「これで反乱分子も何も無くなり、疑いの目は晴れる」

『アメリカは核攻撃を行う事が出来ない』クラスノフは言った。

『全てはテロリストの行動、Tu-160が本土を爆撃しようがロシアは関係無く、戦争を観覧出来る』

「そして貴方は——」

『ああ……』クラスノフは言った。『祖国の恥晒し者』

2025年11月27日AM09:30

モスクワノ大統領官邸

ロシア空軍、クラスノフ大將は大統領執務室の前に居た。唇を引き結び、服装を整え、懷に忍ばせたPSS消音拳銃に視線を向ける。SPは執務室前に1人のみ。他は執務室に至る通路の各出入口近くに配置されていた。クラスノフが事前に『政府若しくは軍内部に裏切り者がいる』という事をほめかしていた結果だった。ドアノブを静かに開け、執務室に足を踏み入れた。

執務室は大きな本棚、幾つかの装飾品から成っていた。奥には大統領専用デスクがあり、机上には2台のPCが配備されていた。そしてそのデスクにベレフキン大統領の姿があった。

「——クラスノフ大將」ベレスキンはロシア空軍の制服に一瞥をくれた後、2台のPC——韓国製液晶ディスプレイに目を配り、2つのマウスを交互に使いこなした。クリック音が唐突に響き、執務室内を駆け巡った。「報告を——始めてくれまいか？」

「はい」

「では誰だ、エンゲルス空軍基地からTu-160を奪った人間は？」

身体を電流が駆け巡る。「Tu-160を奪ったのは……」

クラスノフの視線は下がり、右手に700gの感触がのしかかった。PSSが引き抜かれ、軍服から飛び出した。銃口の先はベレフキンの額に向けられている。

「――私です」

『AM09:41』

A-50の機内、ティーホフ中將は静かに――そして冷静に変革の時を臨んでいた。早期警戒管制機たるA-50は最初の行動が起こされた後、新大統領の命を受け、モスクワを守る“空の盾”としての役割を担う。ディスプレイやレーダーモニター、通信機器につきつきの兵士達にそこで指示を出し、背後に展開するSu-50や周辺基地との連携・管制を図るのがティーホフの任務だ。

「中將」

ティーホフは視線を向け、唸った。「何だ？」

「Rutube他、各国動画投稿サイトに投稿された1件が……」

ティーホフは液晶画面に目を向け、それを眺めた。

それは一連の動きの結末だった。大統領執務室に横たわる1人の遺体。脳天を数発撃ち抜かれ、心臓にも数発。紅色の血は溢れ、執務室の絨毯を黒に染め上げつつあった。ある人物の一人称視点のこの映像は殺害された人物の顔を鮮明に映し続けた。

無論、それはベレフキン大統領。

映像撮影者は足音を響かせ、周囲をぐるりと一回転した後、カメ

ラの目を自分自身に向けた。その人物はロシア空軍大将、クラスノフ。

クラスノフは口を開け、語り始める。

『諸君、私はロシア空軍に所属するアレクサンドル・クラスノフだ。階級は大将である。本日、私はロシア連邦指導者、ベレフキン大統領を拳銃によって殺害した。彼はロシアにとっての害であり、この結果は正しいものだと感じて貰いたい。1つ言えば、我々は似た側面を持っている。今日という日を迎えたという事だ。ロシア連邦は消滅し、新たな国家の誕生を見る事だろう。同胞達は山脈を越え、着々とここに進軍している。各軍事基地も掌握済みで、面白い兵器を複数所持している。そして私はここに宣言しよう、新国家の建国を！栄光の時代の幕開けを！極東の同胞達への永遠の栄華の約束を！強き兵達は障害となる全てを踏み越え、刃向う者には容赦の無い処罰を与えよう。そして、それに該当すべき1つの国——世界を統べし国に一時の盲目と永遠の苦しみを』

クラスノフは笑みを浮かべ、言った。『栄光あれ、祖国よ』

第2話 暗殺（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第3話 墮星

第3話『墮星』

2025年11月27日AM10:00

ロシア空軍早期警戒管制機A-50機内、ティーホフ中將は愁いを帯びた瞳でPC画面に映るRutubeの動画を見据えていた。Rutubeは世界中で知られる動画投稿サイト『YouTube』のロシア版で、ロシア国内では絶大な支持を得ている。Rutubeに投稿された大統領暗殺動画は、既に100万件以上の人間の目に留まり、インターネット世界で大きな波紋を呼んでいた。

「——これより本計画の第2段階『流星作戦』を遂行する」

ティーホフの声が機内に轟く。

A-50機内に配置された液晶ディスプレイ画面には、モスクワ近域を猛進するBMP-3歩兵戦闘車やBTR-80/90装甲兵員輸送車の姿が映っていた。それはベレフキン大統領死亡を受け、ガーリン副大統領を指導者とする『国家非常事態委員会』のモスクワ軍管区陸軍部隊——かつての反乱軍だった。委員会はクラスノフのシナリオ通り、モスクワに戒厳令を出して封鎖を始めた。これらのBMP-3やBTR-80/90の多くは、前政権において親ベレフキン派の政治家達を捕らえる命令の下、動いていた。

親ベレフキン派は一時的に拘束されるか、冤罪を掛けられる運命にあった。

また、空は無数のMi-8とMi-24ヘリコプターが埋め尽くしていた。

「GPSと目と口を奪え！」

A-50にティーホフの声が響いた。Mi-24が赤の広場に降り立つ中での事だった。遙か上空に向け、反乱軍は凶悪な攻撃を仕掛けたのである。

2025年11月27日AM11:30
アメリカ合衆国／コロラド州

コロラドスプリングスに位置するピーターソン空軍基地。

その中に配備された米空軍宇宙軍団（AFSPC）司令部では、軍団司令官のバーナード・オールコック空軍大將が腕を組み、AFSPC司令部の中枢で立ち尽くしていた。彼の揺るぎない眼差しは日本製82型フラットパネルディスプレイに向けられていた。

「衛星が落とされたのか」オールコックは言った。「一体誰の仕業だ？」

AFSPC司令部付けの士官、ウェブスター少将はかぶりを振った。「分かりません。少なくとも、低軌道地球軌道に位置する我が国の軍事・民間の偵察・通信衛星の4割近くがロシア領内から発射された衛星攻撃兵器——『ASAT』によって破壊されたというのは事実です」

ASAT——衛星攻撃兵器は人工衛星を破壊する兵器である。衛星攻撃兵器の歴史は古く、始まりは1959年、これらの兵器は射程等の問題により、主に低軌道地球軌道と呼ばれる高度1500km以下の軌道に位置する衛星しか破壊出来ない。その遙か上、高度

25,000kmや30,000km地点に存在するGPS衛星や通信衛星、ミサイル防衛の要となる早期警戒衛星の類には大型多段式ロケット等を用いた衛星兵器、若しくは核兵器によるEMP――電磁パルス攻撃が望ましい。

「ロシア軍の仕業か？」

「いえ、一概にはそうとも言えません」ウェブスターは言った。

「確かに、攻撃に用いられたASATはロシア領から発射された対衛星ミサイルと高出力レーザーの2つですが、YouTube経由で入った動画や政府筋の情報によると、攻撃の首謀者はロシアの大反政府勢力で、今回の一件は主要基地を奪ったテロリスト達による攻撃だと言われています」

「なるほど……何だか腑に落ちんな」オールコックは頷いた。そして口を噤み、顔を顰めた。「とはいえ、事はそんな悠長に論議してる場合じゃない、宇宙優勢システム戦闘団のSBSS12基も破壊されたんだ。各国衛星の動向を探る事が困難になった上、GPSやDPS、WGS衛星が使用不能に陥った。これらの軍事衛星の新規情報は何か入っていないのか？」

ウェブスターが頷いた。「ロシアによるハッキングについては、衛星管理システム全体の奪取の用途は今日中になると」

「とりあえずは良かった」オールコックは言った。「GPSやDPS、SBIRSを奪われたんだ。我々は目を失ったも同然だ。この状態を打開しないと核の餌食になる」

午前11時時点で、米国とその同盟国はGPSを使用出来なくなった。原因はロシア反乱軍による電子戦攻撃だった。ロシアはAFSPCの衛星管理システムにハッキングを試み、見事システム内に侵入して掌握した。GPSやWGS通信衛星、早期警戒衛星DPS・SBIRSはその時点で使用停止にされた。

「ロシアを甘く見ていたな。我が国の衛星システムを掌握すると
は……」

オールコックは浚面を浮かべた。この状態の危険性を彼は十分理解していた。DPS・SBIRSが使用不能に陥っている今、他国の弾道ミサイルが攻撃を行っても米国は対応出来ない。迎撃の暇を与えず、敵対国やテロ勢力の核ミサイルを前に米国本土や同盟国はただただ焼き尽くされる。

——一時の盲目とはこの事か。

YouTubeの動画を見据えながら、彼は胸に呟いた。

第3話 随星（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第4話 閃光と衝撃

第4話『閃光と衝撃』

2025年11月27日AM09:41

モスクワノ大統領官邸

ロシア空軍将軍、クラスノフ大將は大統領のデスクに座し、机上に配備された2台のPCを用いていた。韓国製ディスプレイはほのかな光を帯びていた。その傍らに置いてあったPSS消音拳銃に一瞥をくれた後、唇を噛め締めて、眼前の床上に倒れ込む1人の男に視線を落とした。その男は顔面に数発の銃痕を付け、胸から紅い紅い血を流し続けていた。

——ベレフキン、祖国ロシアの糧となれ。

クラスノフはそう呟き、PSSをデスクから取り上げた。これらのシナリオを彼は知っている。大統領の執務不能事態を前に誕生した『国家非常事態委員会』はモスクワ——そしてロシア連邦全土に戒厳令を発令し、超国家主義テロ組織との全面戦争を『内戦』と位置付けて他国介入を阻止、反乱軍は対衛星兵器『ASAT』を使用し、米国の民間・軍事衛星を破壊する——『流星作戦』始動させる。その上に位置する早期警戒・偵察・通信衛星網に対しては核兵器のEMPでは無く、米空軍宇宙軍団の衛星システムをハッキングして活動を停止させる。これはロシアが米国と核戦争に突入させるのを防ぐ為だ。

第2段階——『流星作戦』終了後、遂に北朝鮮の出番となる。北朝鮮はSu-50を飛ばし、日本の主要軍事拠点に核攻撃を開始、米国本土にはTu-160と大陸間弾道ミサイルをけしかける。

Su-50はロシア空軍の第5世代戦闘機で、F-22並の性能を備えている。このSu-50に核巡航ミサイルのKh-55を搭載し、韓国も含んだ駐留米軍基地や自衛隊基地に攻撃を仕掛けるという寸法である。これは日本の戦力を確実に削ぐ為の試みで、主要都市に対しては命中率に難があるノドン・ムスダンといった中距離弾道ミサイルで事足りた。

同時に、核弾頭を搭載したテポドン2・3・4、Tu-160長距離戦略爆撃によって米国本土（ハワイ・アラスカ・西海岸）への核攻撃も行われる。しかしロシアは弾道ミサイルを使用しない。あくまでも米露間核戦争に突入させない為だ。

そして米北間の絶え間無い核戦争の終結後——ロシアの時代が訪れる。

彼は執務室前に居座るSPと自身の人生にカタをつけるべくデスクから腰を上げて、歩を進めた。

2025年11月27日PM08:00

日本／横須賀海上自衛隊自衛艦隊司令部

司令部の中、自衛艦隊司令官の國森秀平海将は肩を竦め、落ち着かない気分でPCに目をやっていた。動画投稿サイト『YouTube』の一映像だ。司令官デスクの前には、幕僚長谷田徹海将補と第1護衛艦群司令の古賀龍男海将補が立ち、心配そうに覗き込んでいた。

國森は渋面を作った。「GPSが使用不能に陥ったのはこういう経緯か」

「ええ、それに米軍の早期警戒衛星網も停止し、通信システムも……。通信拒絶後、各基地とは一般電話回線で連絡を取り合っていますが、この国の防衛網が壊滅的である事実に変わりはありません」
谷田は深刻な顔で言った。

「YouTubeにあつた——『極東の同胞』ですか？これが気にかかりますね」

古賀は書類に目を落としながら言った。「中国か北朝鮮か……後者の末路は絶望的です」

その言葉を聞き、うつむと、國森は低く唸った。翻訳された報告書に書かれた『極東の同胞』という単語に対する古賀の推測は恐らくその通りなのだろう。GPSやWGS、DPS・SBIRSが機能停止に陥った今を見逃さず、ロシアないしは北朝鮮、中国が核攻撃を行っても、アメリカや日本は成す術も無く先制攻撃を受けてしまつだろう。一度数千、数億の人間の命が奪われる。

長い沈黙が流れる。「——とにかく、警戒を怠らずに様子を見るしか我々には出来ない」國森は深く息を吐いた。それが自衛隊の足枷、専守防衛だ。

「ええ」

「分かりました」

2人は同調し、頷いた。

國森は微笑を浮かべ、窓から横須賀の海を眺めた。漆黒に包まれている。重く湿った綿の塊が空を、灰色の体躯を持つ鋼鉄の海獣が海原を覆い尽くし、小雨が降りしきっていた。そんな海原の一角を埋めるとびきり大きな海獣——『あかぎ』に彼は目を見張った。

航空機搭載型護衛艦——事実上の軽空母あかぎは、巨額な費用が掛かる事を始めとして、建造時に大論争を巻き起こした。フランスやイギリス海軍の艦に引けを取らぬ性能とも言われるこの軽空母は、最新鋭の技術を盛り込んだ。x o s - 4——と呼ばれる物資運搬用パワードスーツに国産F - 35、と多くの次世代技術を備えている。國森は建造に賛同し、完成を楽しみにしていた。その頃は第3航

空隊司令だった。

海上自衛隊のエリートとして、将来を希望されていた。航空隊司令、航空群司令、航空団司令官と空に精通する彼は各配属時代には絶大な信頼と成果を見せており、それが事実上の機動艦隊を含んだ自衛艦隊を統率する自衛艦隊司令官になった所以でもある。

——これはすごい。

横須賀でお披露目となったあかぎを最初に見た時、彼は思わず声に出して言った。あかぎは予想通り、やはりカタパルトは得られなかった。オーランチオキトリウムの情報を教えない日本への腹いせか、戦略上の常識か——アメリカがカタパルトの技術を与える事は無く、結局スキージャンプ形式となった。現在開発されている電磁カタパルトはそんな苦い思いから、自国で一から造っていいこう——として開発が進められている。日本には石油からの潤沢な資金があり、民間に任せていた複数の科学技術開発に多額の支援金を出していた。主にリニア等が挙げられる。当初の東京 大阪間から東京 博多間まで路線が拡張される事となった。

窓の先を眺める中で、國森は妙な不安を感じていた。心底からの不安。ガラス面に手の平を当て、窓を開けてその正体を確かめようとした。

不気味な信号。

脳裏を駆け巡るそれは本能から来るものだった。彼は目を見開き、脅威を探そうとした。

それは——すぐ其処にまで迫っていた。

事態急変は——唐突に訪れた。

航空機搭載型護衛艦『あかぎ』艦内食堂、長机に並んで座り夕食を摂る三門雄真二等海尉と成美美夏二等海尉は、思わず耳を疑った。NHKラジオが国家非常事態放送として、北朝鮮から多数の弾道ミサイルの発射が確認されたと伝えているのだ。2人は顔を合わせ、

目を見開いていた。

この時、既に日本上空にテポドン2・3・4が飛来していた。これは日本の早期警戒レーダーや米海軍の弾道ミサイル監視艦からの情報で、確認されただけでも10基以上の弾道ミサイルの存在が感知されていた。

目標は日本では無く、米国本土だったがこの知らせは日本中に混乱と恐怖を招いた。GPSが使えず、TV放送も停止されていた今までの不満も加え、これまで平和な時代を過ごしていた国民は政府を非難し、早期の対応を求めた。一方、海自も例外でなく、2人は夕食を素早く済ませると、持ち場たる飛行甲板上へと駆け走った。

北朝鮮上空を駆る1機のSu-50を駆り、ロシア空軍のベロワ大尉は遙か先の目標を見定めた。一種のステルス機能と衛星システムの掌握を武器に、彼は日本本土の防空網を抜けてきた。HMD——『ヘッドマウントディスプレイ』は目標である横須賀基地を捕捉していた。

同刻、2機のSu-50が佐世保に狙いを定めていた。

「ここまでだ……」

マスターアームスイッチ

彼はぼそりと呟き、武器安全発射装置を入れ、攻撃準備を整えた。液晶ディスプレイから対地兵装を選択、下面の兵器庫が開いた。Kh-55の胴体を握り締めたアームが、空中に核巡航ミサイルを解き放った。

紅蓮の尾を曳きながら、Kh-55はその標的——第7艦隊と海自の戦力が集結した横須賀に向けて、その進路を取っていた。マッハ0.7の速度で空を駆る。

このKh-55には200kt規模の核弾頭が搭載されていた。

一方、北朝鮮領内の別所で数基のノドンが韓国 of 釜山、済州島に向けて発射された。ノドンには核弾頭が搭載されており、凶悪な破壊力を備えている。

また、先に発射されていた1基のテポドン4は西海岸サンディエゴの第3艦隊司令部に狙いを定め、ひたすら空を駆けていた。

自衛艦隊司令部でミサイル対応を協議していた國森は——再び窓から外を見ていた。

気味の悪さに顔を顰め、大きな不安を抱いていた。何かが——。

刹那、空に閃光を見た。

窓に突如映った閃光と共に、夜気を震わす重々しい轟音に、國森は愕然とした。

眩いオレンジ色の火球——それが膨張する様が瞳に刻まれた。

その瞬間、彼の視界は反転し——意識が断絶した。

第1章 『崩壊』 完

第4話 閃光と衝撃（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第2章『2025年 1941年』第5話 時空転移

第5話『時空転移』

2025年11月27日PM11:59――。

PM11:59――で動かなくなったデジタル時計に一瞥をくれ、自身の右腕に目を向けるが、時計は針を止め、時を刻んでいなかった。運命の時間、午後11時59分、何があつたのか……。

國森海将はカーペット敷きの冷えた床から身を起こし、呟いた。瞳の奥底に、その真相が浮かび上がるのだが、逆にその事を自分自身で否定していた。大体の検討はついていた。閃光と衝撃――それを目にした時、彼の胸には大きな不安と恐怖が兆した。自身の故郷、広島県広島市で1945年の夏に起きた出来事が、同じように此処横須賀で、再来するのだ……。國森は絶望した。

閃光――衝撃――不気味なキノコ状の雲。

周囲を縁取る邪悪な赤みと共に、國森はその光景に目を見張っていた。まさしく、それは――核爆発というべき現象だった。数万人の命を葬り去った兵器の現象。

背後で倒れていた長谷部海将補と古賀海将補の2人が起き上がった時、外を見ていた國森の虚ろな顔を覗き見れた。彼としても、精神面は弱い。

「――我々は生き残つたのだろうか？」

國森は呟いた。「あれを見て、命があるとはな」

2人は顔を見合わせ、國森に視線を戻した。彼等は閃光と衝撃しか、記憶に記されていなかった。何が起こっているかだけでなく、何が起こつたかも検討がついていなかった。再度、2人は顔を見合わせた後、國森の見据える窓の方に、目を向けた。

広がっていたのは――何気無い横須賀の海。

ただ、不気味なまでに静寂が其処を支配していた。

1941年11月28日AM07:00

日本領朝鮮／済州島

異常事態から7時間と1分。

済州島、韓国海軍第7機動戦団母港を有するこの島は、外洋作戦展開能力を備えた一大拠点地である。世宗大王級、栗谷李珣級イージス艦を中心に、駆逐艦10隻、独島級揚陸艦1隻、潜水艦4隻、P-3Cやヘリコプターを含んだ航空戦力を含んだ大戦力を第7機動戦団は有し、2025年11月27日時点でも、仮想敵国に睨みを利かせていた。第7機動戦団は2個戦隊体制を取り、釜山や鎮海基地を行き交いしている。1個戦団はイージス艦1隻、駆逐艦3隻、潜水艦1隻、支援艦、航空機で構成されている。

独島級第2番艦『馬羅島』艦長、趙正勲大領はCIC内部の大型モニターに目を向け、全容の解明に急いでいた。

「通信網はまだ、復旧しないのか？」趙は訊いた。

馬羅島副艦長の道中領は背筋を伸ばし、直立不動の体勢を保ちながら、趙に向かって言った。「未だ復旧出来ていません。GPSも拒絶を続けています」道は渋面を浮かべた。「艦長、やはり例の爆発が関係しているのではありませんでしょうか？既にソウルは――」

「それ以上、言わなくていい」

趙は重々しく頷き、CIC全体に目を行き渡らせた。

「敵は近い」趙は言い、レーダーの表示モニターを指差した。レーダー画面には、複数の機影が確認され、正体不明機の到来を告げていた。CIC内部の人間全員が、その機影の正体を人民解放空軍の戦闘機か爆撃機と推測していた。

しかし、その正体は——大日本帝国海軍だった。

第2章『2025年 1941年』第5話 時空転移（後書き）

大領、中領は大佐、中佐に相当する大韓民国海軍階級呼称。

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第6話 零戦VSF35

第6話『零戦VSF35』

1941年11月28日AM06:20

日本領朝鮮/済州島

済州島南西部は南済州島群大静邑、そこには大日本帝国海軍の飛行場があった。

通称——『アルトル飛行場』、広さ約66万平方メートルのこの軍事拠点は、1926年から1930年代半ばにかけて、建設が行われていた。1937年の日中戦争勃発と共に飛行場は更なる拡張工事がなされ、敗戦時にあたる1945年には、飛行場は80万平方メートルの規模に膨れ上がっていた。1937年7月7日、日中戦争開始時には、当時最新鋭だった九六式陸上攻撃機を用い、中国大陆に向けた渡洋爆撃の戦略拠点でもあったこの飛行場は1941年現在、戦略的価値の程度は下がっていた。

11月28日早朝、飛行場はいつもとは様子が一変していた。目印になる管制塔、飛行機格納庫に誘われたのか、奇妙な航空機が1機、整備場に駐機されていた。

その朝、慕瑟浦^{モスルガ}の兵員寄宿舎から呼び出された本庄真人海軍少尉は、畑の点在する村道を歩いている中で、その異常事態に気付いた。

——見慣れない航空機が飛行場に駐機している。

中国大陆か、東南アジアか、それらの地域で何か特別な出来事があるのだろうか？と本庄は思ったが、そうではなかった。遂に日米戦争勃発か？それとも日中戦争への新たな戦略か？複数の考えが膨らんでいく中、飛行機格納庫の出入り口に屯していた部下が、本庄の疑問を更に駆り立てる一言を言い放った。あの航空機は、何の前触

れも無く、突然薄闇の中から出てきたのだ。4発式の巨大なプロペラ、重厚な機体。曙光を浴びて、白銀色の輝きを放つその機は、本庄や飛行場の人間にとって、これまで見た事の無い航空機だった。

この飛行場の誰もが知らないのは、無理もなかった。それは84年後、遙か未来の韓国海軍の哨戒機——『P3-CK』だったからだ。

P3-CKは米国製海上哨戒機、P3-Bに改良を加え、開発された国産機である。機体の外観、胴体部自体はP3-Bと同じだが、国産の最新鋭電子機器を搭載し、ハーブーンミサイルや対潜誘導爆弾等、強力な火力を備えている。故に、外洋展開任務ではなく、沿岸部や港湾部の哨戒任務を主要コンセプトとしている哨戒機なのだ。そんなP3-CKの事を知らない本庄は、未知との遭遇の場面に立っていた。何といっても驚くべきは、その重厚な機体と4発のプロペラだった。4発型の陸上航空機は帝国海軍はおるか陸軍でさえ、持つてはいない。内部は更に感嘆すべき光景であった。奇妙な機械が轟めき合い、不気味な震動と耳障りな無線の雑音が、虚空の機内にこだまし続けている。

正直、誰も内部は理解出来なかったが、外見だけで十分だった。それは九六式陸攻を始めて目にした時——に匹敵する程の興奮と感動を、一同に与えた。

「乗ってきた乗員は？」

本庄は部下に訊くと、誰もが弾薬庫——の方向を指差した。飛行場の武器弾薬を管理、保管しておく施設だ。管制塔や通信施設等、尋問するにはもう少し整った環境は幾らでもあったが、国籍も何も正体不明の乗員に通信機器等、帝国海軍の技術の程を盗み見られなくなかった——もしくは、秘密裏に事を進めたかったのだろう。尋問を執り行う様子を見なくなった本庄だったが、その行く手を上官に止められた。

本庄は折り目正しく敬礼し、上官に目を向けた。

上官は低い声を漏らしながら静かに頷き、零戦を指し示した。最

新鋭の機体だ。

「本日0500時、江汀村の湾岸に奇妙な建造物が報告され、正体不明の艦艇の姿が目撃された。貴様にはその艦艇に対する偵察任務を行ってもらおう」

「艦艇……ですか」

「そうだ。状況によつては、攻撃も視野に入れておけ」

本庄は頷き、「了解しました」と一言告げた。

濟州島上空、時刻は午前7時を回った所。

正体不明の4発機に疑念を抱き、零戦に乗り込んだ本庄は江汀村について考えていた。江汀村は正直な所、本庄もあまり知らなかった。濟州島南部に位置する小さな漁村——艦艇を収容する港湾施設も無ければ、戦略的価値なども無い、言ってみれば辺境——未開拓——価値の無い土地なのだ。そんな所に突然、前触れもなく出現したという建造物群と艦艇は、アルトル飛行場の4発機と関係しているのではないか。本庄はそうように解釈し、更なる疑問を膨らましていた。

零戦は計8機、その編隊を率いる本庄は先頭に立ち、前方を見据える。

刹那、視界の端に一筋の閃光を捉えた。途端に、3つの閃光が間近に浮かび上がった。

本庄達は知らないが、それは韓国海軍のSVTOL戦闘機、F-35Bの攻撃だった。独島級揚陸艦第2番艦『馬羅島』——SVTOL戦闘機艦載仕様に当初から建造された艦——から発艦した飛行隊の先遣編隊だ。輸入品で、性能は無論落とされていて、日本の国産機『F-35B』に比べれば格段に劣るが、巡航速度がせいぜい160ノット程度の零戦なら、当然話にもならない程に圧勝だろう。

F-35Bを駆る、馬羅島飛行隊先遣編隊長、柳承復中尉は機首のAN/APG-81 AESAレーダーが示した敵情報をHMDに映し出された目印から確認した。黄色の丸印、それが全部で8つ表示されていて、敵編隊だというのが分かった。彼はその敵の位置情報をデータ・リンクを通じて僚機や馬羅島CICに送信した。後は司令部からの攻撃要請を受けるのみ。それで敵機に対し、攻撃が行えた。

そんな中、馬羅島CICでは業を煮やした趙大領が、F-35B柳機からの通信報告を受けていた。飛行隊からの報告から敵は8機と断定された以上、数で劣る分、性能と先制攻撃で圧倒せねばならない。それに待機する編隊に即時命令を下さなければ、彼らの身も危ないというものだ。

「諸君」趙はCICに語りかけるように話し始めた。「これより、我々は未確認機に対して攻撃を行うが、その一切の責任は全て——私が持つ。だから、友人たるF-35のパイロット達の命を救うとも思っ、て、国家の敵を全力で排除して貰いたい」

床から天井まで、CIC一面に広がったその声は、一つの区切りとなった。司令部との通信が拒絶され、正体不明の機が接近する今、趙の行為は黙認された。

そして本庄の今——見た事の無い恐怖が迫る今——に戻った。4つの閃光は後ろに白煙をたなびかせ、真っ直ぐ、そして猛スピードでこちらに迫って来ていた。その正体はアルトル飛行場の巨人機、P3-CK同様、誰1人として理解出来ない存在だった。

84年後、ごく当たり前の空中戦である有視界外戦闘に、8機の零戦は放り込まれた。F-35B全機がAIM-120アムラームミサイルを発射、計8発はF-35Bから放たれると、天空を駆けていった。

AIM-120——中距離空対空兵器であるアムラームミサイル

は、撃ちつぱなし・多目標攻撃能力を備えている。ミサイル自身がレーダー誘導を可能とし、命中前に敵機の攻撃を回避出来るのが、アムラームの利点といえた。また、F-35Bの目であるAESAレーダーは、敵機のレーダーや敵の放ったミサイルに電波妨害を行う事が可能で、敵ミサイルをより回避し易くしている。

しかし、零戦にミサイルなど存在する筈も無く、遙か彼方のF-35Bに対する脅威は何も無かった。8発のAIM-120は寸分狂わず、敵である零戦に向け、突き進んでいた。

「一体あれは……」

4つの閃光は更に数を増し、8つになった。その正体は知らないとはいえ、本庄はその異様な物体に、ただ知れぬ不安と恐怖を抱きつつあった。

そんな、何も知らない本庄以下8人の零戦パイロット達に、AIM-120の攻撃の手は緩まなかった。マツハ3以上、4に近い速度で飛行するAIM-120の第1波は、4機の零戦に未来の洗礼を教え込んだ。本庄機の横、これまで共に飛んできた部下の零戦が、いとも簡単に――そして無残に碎け散った。紅蓮色に染め上げられ、火達磨と化した零戦は落ちていく……。

1機、また1機と零戦が粉碎された。残った4機も、その運命を辿るのは早かった。

マツハ4という、音の壁を叩き壊しながら突進してくる飛翔体の前に、本庄の乗る零戦は――勝ち目が無かった。残りの3機と共に、炎を曳きながら下へ下へと落ちていった。

「敵編隊の全滅を確認」

柳のHMDからは敵機が目印が消え、画面は正常時に戻っていた。
「Good-kill!!」

馬羅島CICでは、各員が密やかに飛行隊の勝利を讃えていた。

「了解、引き続きP3-Cの搜索を続けられたし」

趙はそう言い、道少領に向き直した。

「艦長――」

「分かっている」趙は言葉を遮って言った。「拘束するのであれば、受け入れよう」

「あくまでも……違反は違反ですの」

「それはそれとしてだ」趙は言い返した。「まだ拘束しないで貰いたい。P3-CKの乗員達は、救助を必要としている筈だ。彼らの最後の報告は、江汀村の飛行場が消え、急遽大静邑の空軍基地に向かったといっていたが、その中に『侵入者あり』——という報告があるのだ。見過ごす訳にはいくまい。私が縛り上げられ、軍法会議にかけられる前に、救出しておきたい」

趙は顔を上げ、道を見据えた。「頼む」

道は言を曖昧にしながらも、その要求を呑んだ。

第6話 零戦VSF35（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9921p/>

時空艦隊『未来』

2011年2月20日17時46分発行